

第7回

個人部門 最優秀賞

「わたしの夢と郷土」

佐賀県立伊万里高等学校3年

下條 絵美さん

私は将来、今住んでいる地区で暮らしたいと思っている。もちろん一度は都市に出てみたいし、海外にも行ってみたいとは思いますが、やはり私の生きる原点はここであり、最終的にはここに定住したいと思うのである。

私の住んでいる地区浅谷は海や山の自然に囲まれており、のどかな所である。私の家はその地区の西の方にあり、海に沈む夕日を何にも邪魔されずに、窓から大パノラマで見ることが出来る。また、斜面に建つ家々の窓に夕日の赤い色が映るのも、どこか異国にいるようでとても美しい。山にはアケビや山葡萄、野イチゴ等が実り、田植えや稲刈りの時期の楽しみだ。私は、家を出て僅かに歩くだけでこのような四季の移ろいを感じる事ができて、本当に幸せだと思う。

そして、私が浅谷を愛する最も大きな理由は、ここに古くから伝わる伝統芸能「浅谷浮立」故だ。物心ついた時から簾(ささら)という竹の楽器を持って、八月初め頃の夜の練習に参加していた。最初は、練習のあとで配られるジュースに釣られて行っていたのだが、そのうち友達と会うのが楽しみになり、楽器が好きになり、どんどん練習が楽しくなっていた。現在、私は笛、父と弟は鐘、母は薙刀を担当し、家族全員で参加している。昔、父が叩いていた一番鐘を、今は弟が叩いている。伝統が受け継がれていくという事は良いことだと実感できる瞬間だ。

浮立の練習は、毎年その季節になると、浮立保存会の会長さんが地区で参加者

の氏名を放送し、集合を呼びかける。しかし、夜八時からの練習なのに始まりは三十分遅れ、しかも名簿に載っている人数の半分くらいしか集まらない。主要な楽器である笛、鐘、太鼓、小張の人数が少ないと楽曲が成り立たないのだ。太鼓は二人で十分でも、笛は最低四人はいないと音が途切れてしまう。一度、笛が私と山田さんの二人だけだった時は、休む暇が無く大変だった。その日は運悪く、他の笛吹きさんたちが仕事の都合や家の都合で来られなかったのだが、私には将来の浮立の行く末を暗示しているかのように思えた。実際に浅谷のみならず町内全体で少子高齢化は進む一方で、浅谷浮立でも後継者不足が問題となっている。私たちのように学年が進んだ高校生になっても練習に来るのは、たった二、三人というのが現実である。町内の若者は大半が町外に就職するが、それでも浅谷に住んでいる間は伝統芸能である浮立に参加して、自分の生まれた郷土の伝統を受け継いで守って欲しいと思うのは、地区に対する私の欲目だろうか。

もし浮立が無くなったら、と思うことが時々ある。現在伝えられているものは戦後私の祖父等浅谷に住む青年四人が中心となって再興させたものである。もし浮立が無くなったら、今は亡き祖父に申し訳が立たないし、万が一そのような事になれば、祖父と同じように必ず再興させたいと思う。浮立が無くなるなど杞憂に過ぎないと思う人もいるかもしれないが、ここ数年の練習を観て、私は本当に危機感を募らせている。

祖父が再興させる前には戦時中という事で、楽器である鐘などを国に供出したために中断を余儀なくされていたということだった。しかし現在、そしてこの先は、楽器の不足でなく人の不足

で浮立を続けていくことができなくなるかもしれないのだ。伝統を受け継ぐ人々がいなければ、浮立は廃れるしかないのである。

私は今後進学する予定であるが、何とかして家から通勤できるくらいの所に就職し、愛する郷土で暮らし、浅谷浮立をいつまでも守り続けたいと思う。今時私のような人間は珍しいかもしれないが、少しでも私の思うことに共感してくれる人がいるならば、地域の伝統はきつとずっと守られると思う。

私はこれからも浅谷浮立に携わり、継承し、絶えることなく守っていききたいと思うのである。

個人部門 優秀賞

「輝き始めた大志」

福岡県立三池高等学校3年

溝上 亜紀さん

馬の毛の一本一本を集め合わせてできた筆、まるでメロディーのような墨を擦る音、書の歴史を積み重ねてきた古の中国の春秋へ思いを起こさせる墨の香り、筆を紙の上で動かすと墨が下へ下へと染み込んでゆく感覚、その全てが私を夢中にさせる。書道は私の過去であり、現在であり、未来だ。

高校に入り、私は書道部に入部した。そして、私は六月に行われた運動会に向けての大幟の書き役に指名された。大役だった。しかも練習期間は、たったの六日だ。そんな短期間の中で、毎年運動会を盛り上げている大幟を本当に書けるだろうか。そんな不安が、たちまち込みあげてきた。そして、先生がお手本を書いてくださった。私たち部員は正座をして、先生の周りを囲んだ。お手本は白い紙に書かれた。その紙や筆の大きいことにとっても圧倒された。いよいよ先生が、お手本を書いていかれる。始めに書き出す時の「ドン」という大きな音。墨が筆の先から飛び散っていく様子を見てみると、まるで体中に電流が流れてくるようだった。私の心は書きあげられていく書に魅きつけられて、魂そのものに響いてきた。その興奮と衝撃が、天に昇っていくようだった。書道に対する情熱と、込み上げてくる感動が、私を虜にした。その時私は、自分にしか書けない自分だけの書を書いてみせる、と決意した。練習の時に初めて自分の手にした大きな筆は、更に私を圧倒させた。そして墨を右手に、バケツに入れた墨を左手に。練習の時には、新聞紙七枚を接ぎ合わせたものに書いた。新聞紙の上は、とてもツ

ルツルしていて本番で書く布とは大違いだ。そういう状況下で、とても不安な気持ちもあったが、そんな不安よりも、大幟を書けることの喜びの方が勝っていた。

そして六日という短い練習期間を経て、いよいよ大幟清書の日がやってきた。清書は、体育館で行われた。準備する最中、緊張と、これですべて終わってしまうんだ、という寂しさのようなものが込み上げてきた。本番の前に、何回か練習した。緊張で手が震えた。そして、とうとう大幟の清書に取りかかることになった。濃墨をバケツ一杯に入れ、その中に筆を浸した。濃墨は、とてもドロドロとしていた。「ドンツ」深閑とした体育館に響き渡るその音。その音と共に飛び散っていく墨。私はその瞬間、他のことは何も考えられなくなり、無我夢中で書いていた。筆を体で動かして書いていく腰を低くし、足を思いきり踏ん張りながら、書道に対する思いを込めて。途中で布に墨がつかなくなった。やはり練習に使った新聞紙のツルツルとした面上で筆を動かすのとは格段と違っていたため、それに一瞬ひるんだが、今度は筆を布にこすりつけながら書いていく。まるで掃除の時にデッキブラシを床にこすりつけるかのように。手には確かな感覚と、心の中には確固たる完成への信念がメラメラと輝きを放っていた。書き終わると、みんなからの拍手と喝采があがった。額からは汗が流れ出ていた。とても短い時間のように思われた。先生からは、勢いのある字ができた、とお褒めの言葉をいただいた。

運動会当日、私の元気な大幟が、青く澄み渡った大空に気持ちよさそうに、はためいていた。

私は将来、子どもたちに、私流の書道

を教えていきたい。現在、コンピュータ技術が進んでいき、文章の作成もキーボードを叩くことが主体となっている中で、日本文化の一つである書道を守り抜き、次世代に書道のすばらしさを伝えていかなければならないと私は思う。それが私の使命であるようにも思われる。私が大幟を書くことができた経験は、私の将来の道を照らす鍵となった。今、私はこの輝きに満ちた大志を胸に抱き、将来の夢を叶える第一歩を歩み始めた。

個人部門 審査委員特別賞

「基地問題解決の夢」

沖縄県昭和薬科大学附属高等学校2年

崎濱 紗奈さん

私の住む沖縄県は青い海、青い空で知られる美しい島だ。この島に「癒し」を求め、毎年数百万人の観光客が訪れる。観光立県である沖縄にとってこれは喜ばしいことだ。しかし、沖縄には別の面もある。それは戦後六十年間ずっと、この島が抱えてきた「米軍基地問題」だ。今から六十年前、日本の敗戦が決まり、沖縄には米軍が駐留することになった。彼らは住民から無理矢理土地を奪い、基地を建設した。それ 故今も基地と隣り合わせに暮らす県民がいる。普天間基地、嘉手納基地がその例だ。住民は昼夜を問わず繰り返される爆音に悩まされている。騒音問題の他にも沢山ある。この七、八月だけでも実に様々な事件があった。米兵による女児わいせつ事件や、暗黙のうちに行われていた沖縄自動車道での訓練など、枚挙に暇がない。

しかし中でも一番大きな問題となったのは、沖縄本島北部の基地、キャンプ・シュワブ内にある都市型訓練施設での訓練強行だ。この施設では実弾訓練が行われている。他にも実弾演習場は多く存在するが、この施設が特別視されている理由はその立地にある。信じられない話だが県民の住宅地から三百メートル、高速道路から二百メートルのところ positioning のだ。住宅地から僅か三百メートルの距離なので流弾事故の可能性もある。そこで住民は抗議集会を幾度となく開いてきた。やがてそれは県民一人人を巻き込んだ大規模なものへと発展した。先頭に知事が立った。県民の怒りは頂点に達していたのだ。危険な訓練を強行する米軍の横暴さに誰もが怒りの声

をあげた。そして知事をはじめ各界の県代表が日米両政府に県民の怒りを伝えるべく上京した。しかし米国側は「安全だ。問題ない」の一点張り、日本政府もそれに追従して「中止要請は無理」と応えた。後には傲慢な態度への怒りと、深い無力感のみが残った。

「県民の怒りの渦が何故伝わらないのか」「基地問題解決の糸口は存在するのか」という疑問と共に、私の胸中は政府と米軍への憤懣やる方ない気持ちで一杯だった。

しかし、怒りを声高にぶつけることが最善の方法なのだろうか。反日デモを例にとつてもわかるように、石を投げ、大声で日本を罵る中国国民の姿を見て我々は過去の歴史に申し訳ないと思いつつも、何かしからの不快感を抱く。県民集会もそれと同じで、実状を訴え、伝えることはおろか、受け手側に不快感を与えたのみかもしれない。今必要なのは声高な対決姿勢を見せることではなく、実状があるがままに冷静かつ丁寧に伝えることだ。その際国や軍といった大きな組織にとどまらず、米兵を含めたアメリカ国民一人ひとりの理解が不可欠だ。政府と政府との交渉には限界がある。

それはNGO等の活動が政府の足りない部分を補完することで、世界が動いていることからわかるように、既に現状が立証している。そもそも政治や外交の果たす役割は、互いの利害関係を調整することである。現在百九十二の国家があるのに対して全人口は約六十三億人だという。多数利益を代表せざるを得ない国家間の取引だけでは当然、国民の利害を調節することはできない。必要なのは、世界の構成員である私達一人ひとりが政治や外交を考え、行動することだ。政府間の交渉に限界が生じた今、基

地問題やその他数々の問題を解決できるのは市民一人ひとりの有機的交渉の継続なのだ。

世界の価値観が多様化する今日、将来私が外国人と出会う機会も多いだろうと思う。米国人や中国人もいるだろう。友人になるために、私たちは互いの理解に努めるはずだ。それは人間的理解に始まり、文化的、政治的立場への理解に発展するだろう。相互の理解が成立したとき、私たちは素晴らしい友人関係を築くことになる。これは一見、利害調整を主とする、国家間の外交とはほど遠いものに見えるし、事実、この市民単位の関係は外交とは程遠いものである。しかし、今求められているのは急激な変革ではない。必要なのは非常に穏やかな改革なのだ。個と個の結びつきこそが核となる穏やかな改革。私の夢は、この穏やかな改革に参加する一人となることだ。

グループ部門 優秀賞

「私たちにできることから」

山口県立厚狭高等学校1年

清水 香奈美さん

篠田 綾美さん

文化祭1ヶ月前。今年のテーマがなかなか決定せず、私たち新聞部員は悩んでいた。そんなときに出会った「世界でも100人の村だったら」。私達の前に一冊の本とテレビ番組のビデオがあった。ビデオ視聴をした私たちは涙が止まらなかった。フィリピンのゴミの山でゴミを拾い家族を支える12歳のモニカちゃんの健気な姿に胸が締め付けられた。また、本の中の一つひとつの言葉を信じられない思いで読んだ。「100人のうち80人は標準以下の居住環境に住み、70人は文字が読めません。50人は栄養失調に苦しみ」というフレーズを手がかりに、世界の貧困について新聞部全員で、更に詳しく調べることにした。手分けをしてデータを集めた。それらはどれも衝撃的なデータばかりだった。特に飢餓や貧困に苦しむ子どもたちの悲惨な実態は辛い事実だった。世界では5秒に一人の子どもが飢餓のために命を落とし、学校に行けない子どもが1億人以上いる。

私たちの日常が世界の全てではないことは、漠然とは理解しているつもりだった。しかし、こんなにも具体的な形で現実をつき付けられ、何かをしなければならぬという思いにさせられたのは初めてだった。新聞部でできることは何かということについて話し合いを続けた。そして、テーマが決定した。「私たちにできることから」貧困に苦しむ子どもたちへ――

しかし、調べれば調べるほど、世界が抱えるあまりに大きな問題に茫然とし

た。私たちの力は小さく、できることは限られている。世界の五人に一人は1日に1ドル以下で生活しているといわれている。食料がなく安全な水が飲めない人々がいる。薬も医師もなくHIV感染や様々な病気に苦しみ、地雷や戦争の恐怖におののきながら毎日を送っている子供たちがいる。支援を待っている人たちは世界中に数限りなくいる。私達には何もできないのではないかという不安に襲われ部員全員が無力感を感じ挫折そうになっていた。

しかし更に私たちは何ができるのかについて話し合いを続けた。その中で出てきた意見は、身近なことからスタートすればいいのではないかということだった。世界という大きな規模で考えると行き詰まってしまう。私たちは友だちが困っていたら何とかしてあげたいと思う。私たちが同じ地球に住む仲間として何かをしたいと最初に考えたきっかけは、フィリピンのゴミ山で生活しているストリートチルドレンたちの姿だった。フィリピンは私たちと同じアジア地域にあり身近な国の内の一つである。また、日本が国家として経済援助をしている国の一つであり、私たちにとって友達の国とも言える。最初に考えるきっかけとなった貧しい子どもたちがいる国、そして、歴史的にも縁のある国でもあるフィリピンの困っている子どもたちへの支援に取り組もうと意見がまとまった。このように世界の貧困に苦しむ身近な隣人に、みんなが手をさしのべればいっか大きな力となり、世界は変わるのではないだろうか。こうして新聞部の文化祭の活動がスタートした。

「アジアでも近い国の一つであるフィリピンをみんなにも知ってもらうためにフィリピンという国や、貧困の実態、

貧困層の子どもたちの様子を調べその結果をまとめ展示をする」「フィリピンの子供達の手助けをする」という二つの目標を立てた。

最初に、フィリピンについての調査とその結果を大判用紙にまとめた。大判用紙の枚数が増えていくことと比例するかのように部員の思いは深まっていった。

フィリピンは日本の8割程度の国土を持ち、約7千の島からなる。人口約七、六五〇万人（2000年調査）、国語はフィリピン語だが、約80前後の言語があるため、フィリピン語と英語が公用語として使用されている。そして、このような客観的なデータとは別にフィリピンの社会が抱える問題も浮かび上がってきた。フィリピンでは一部の豊かな層がフィリピンの全収入の74・2%をしめ、多くの貧困層は僅かな収入で暮らしている。貧富の差の激しい国である。私たちは更にフィリピンの貧困の原因と状況について調べてみた。フィリピンは1946年、独立するまで、300年にわたるスペインからの支配を受け、その後はアメリカ資本の影響を受けた。このことが大土地所有制度、モノカルチャーによる大規模プランテーション農業など、今なおフィリピンの社会の歪みの原因となっている。そして、現在は一部の富裕層と約七十%の貧困層という社会の仕組みとなっている。貧困層の人々の中でも極貧困層の家族は、2004年のフィリピン国家統計局の発表によれば、平均年収二三、一九九ペソ（円換算1ペソ≒2円）以下で生活しているといわれている。この僅かな収入で6人家族が一年間生活しているのである。

そんな中で多くの貧困層の子どもたちは学校に通えるのか。私たちはフィリ

ピンの学校制度を調べてみた。フィリピンではデイケアセンターという小学校に入学する前に受ける義務教育が1〜2年間あり、その後の小学校6年間で義務教育となっている。そして、高校が4年、更に大学や職業訓練大学に進学するという教育制度である。

国により義務づけられているはずの教育なのである。しかし、多くの子どもたちが貧しさ故に、教育のスタートであるデイケアセンターに通うことができていない。

私たちの中にフィリピンの子どもが一人でも多くデイケアセンターに通うことができるよう支援をしたいという思いが募った。

そのような中、フィリピンのアラバト島・ペレーズという貧しい農村部の地域のデイケアセンターが支援を必要としていることを知った。私たちは早速連絡をとって、どのような支援が必要かを聞いた。

ペレーズの最大の産業は、椰子油の原料であるコブラの生産と漁業である。しかし、台風の被災などもあり人々の収入が安定せず、平均家族年収は国家平均の僅か6・5%以下一、五〇〇ペソである。

この年収は、首都マニラのゴミ拾い労働者家族の更に2分の1から3分の1程度だそうだ。そのため、義務教育は無償であるにもかかわらず、子供達は、デイケアセンターに通うための文房具代や教科書代、給食代さえないため教育が十分には受けられない。それでも、資料として送られてきた子供たちの写真の中で彼等は貧困に負けることなく、とても活き活きと生きている。その明るく元気な笑顔に新聞部員の方が励まされた。「ペレーズの子供たちに学資を送ろう」が合言葉となった。

しかし、単なる、募金活動という形では、新聞部の思いは伝わらない。調査結果の展示とともに、私たちの、この思いを形にしたかった。そして、自分たちがメッセージを込めて制作したものを文化祭への来場者の皆さんに購入していただくことにより協力を得たかった。ただ、一方的にお金を寄付していただくのではなく、ペレーズの子供達への私たちの思いを伝えるのでなくては、この支援活動は意味がないのだ。

そこで、部員一人ひとりが世界の苦しむ人々や子供達に思いを込めて文章を綴った。それを文集にした。また、絵葉書の手作りにも取り組んだ。

文化祭の前日には、エッセイや詩、小説、論文という形で表現した文章が出来上がった。また、ペレーズの子供達に思いを馳せ、一枚一枚手作りした絵葉書も約百枚が描きあがった。新聞部が作業を続ける過程では、「私も絵葉書作らせて」と新聞部の活動に共感した部員以外の生徒も絵葉書作りに協力してくれた。

そして、文化祭当日、新聞部の展示会場では「私たちが支援する国フィリピン」「なぜフィリピンなのか」「デイケアセンターの子供達」などの展示とともに、絵葉書、文集が展示販売された。「素晴らしい取り組みね」と何枚も絵葉書を購入してくださる保護者もおられた。展示物に対しては「よく分かりました」と声をかけていただいた。ペレーズの子供達の可愛い写真の前で微笑まれている方もおられた。多くの方の温かい心に支えられてペレーズの子どもたちへの支援金が集まった。

一方で、新聞部員は各クラスに属し、各委員会にも属している。私たちは貧困に苦しむ子供達の実態を一人でも多くの人が理解することが世界から貧困

を無くすことにつながると思い始めていた。そこで自分達に関わるあらゆる場面で、厚狭高校生に理解と協力を求めるために行動した。

古本市を計画していた図書委員会と、「リサイクル」というテーマで「牛乳パックを使った絵葉書や小物の販売」「フリママーケット」を企画していた1年1組が新聞部員の提案を了承して、その収益金をフィリピンに送ることを決定した。文化祭終了後、厚狭高校3団体合計、一万七千円の収益金がフィリピンのペレーズのデイケアセンターに送られた。

文化祭から二ヶ月が過ぎたある日のこと厚狭高校に、ペレーズの子供達から可愛い寄せ書きが届いた。大判用紙に木や花、魚や風船等の絵が色とりどりのクレヨンで描かれていた。一つひとつの絵に子供達の名前が直筆で書かれている。中央には、英語で「To ASA High School」と書かれていた。子供達はまだ、文章が書けないため、絵を描いてお礼の気持ちを表現してくれたそうだ。

思いがけない素敵なプレゼントは、厚狭高校生の心に素晴らしい感動を与えてくれた。

現代日本の私達は物質的には豊かだが、感謝の気持ち、喜びの気持ちを素直に表現する心の豊かさを失っていたように思う。ペレーズの子どもたちは素直な表現で気持ちを伝えてくれた。私達は豊かな心をフィリピンの貧しい子供達からもらった。このように世界中で小さな支え合いと支援の輪が広がっていく。豊かや紛争に苦しむ世界が少しずつ豊かで平和な社会に変わっていく。私たちはそう心から信じて次なる活動を始動した。

グループ部門 審査委員特別賞。

「ネクタイと日本人」

「クールビズとは何だったのか」

広島県立広島国泰寺高等学校2年

大石 梨絵さん、花戸 彩さん

杉山 貴文さん、梶山 拓也さん

1、はじめに

先日、私たちの高校の先生が「周りじや『クールビズ』って言うてるのに、何故わしらはネクタイをせにやいけんのか」と言っていた。私たち国泰寺高校の男性教員はネクタイを着けることが義務づけられている。このことがきっかけとなり、そもそもなぜネクタイをしなくてはならないのかという素朴な疑問が湧いてきた。クールビズは、ネクタイを外すことだけを意味しているのではないにも拘わらず、なぜネクタイのみが注目されていたのか。単にネクタイ業界の反発があったせいではないのではないか。私達は、改めて、「なぜ『ネクタイ』なのか」という問題を考えてみることにした。

2、温暖化とクールビズとネクタイ

地球はどんどん暑くなっている。その主たる原因は地球温暖化である。このまま温暖化が進んでいくと、100年後には世界の気温は平均して5・8度上昇すると言われている。そのことによつて、水不足や海面の上昇による国土の減少も起こってくる。環境破壊によつて農作物も大きな打撃を受け、外国からの食料輸入に頼っている日本などは、さしずめ深刻な食糧不足に陥ることになる。

この温暖化に対する対策として、平成17年2月16日、先進国に対して温室効果ガスの削減を数値として義務づけた京都議定書が発効された。日本も削減

を義務づけられ、2008年から2012年の間に6%も削減しなければならなくなつた。その結果、今年4月、環境省は夏のエアコンの温度設定を28℃にするよう呼びかけ、今までよりも室温の上がつた仕事場でも快適に過ごせるように、ノーネクタイ・ノー上着ファッションを提唱した。これが『クールビズ』である。

そもそもなぜ、今までサラリーマンはネクタイを着けていたのだろうか。いつ頃から、「洋服にはネクタイ」という習慣ができたのだろうか。そして、ネクタイは日本にはいつ頃入ってきて、かくも絶対的な地位を築き上げたのか。まずは、その歴史からひもといて見る。

3、ネクタイの歴史

ネクタイは、2世紀初頭にローマ兵士が首にウールの布を巻いていたのが始まりである。これは防寒のためと、妻や恋人たちが戦地に向かう兵士たちに無事を願い、お守りとして贈るという意味があつた。17世紀後半、フランスで王が宮廷ファッションに採り入れ、その後一般市民へと普及していったと言われている。十九世紀に入り、フランスからイギリスに伝播しその頃から『ネクタイ』と呼ばれるようになった。

1890年代に中央にノット(結び目)がある現代の『フォア・イン・ハンド・タイ』が登場した。そして、1897年、カタログ販売で知られるアメリカの百貨店シアーズが、その販売戦略として「ネクタイをしてない男性は、だらしない人」というキャッチコピーをカタログに登場させた。このキャッチコピーは見事に当たり、世界中の人が、窮屈さを感じながらもネクタイを締め始めたのである。

日本にネクタイが入ってきたのは、19世紀の中頃である。アメリカに渡ったジョン万次郎の帰国とともにたらされた。明治17年、帽子商の小山梅吉の手によって、蝶ネクタイの国産第一号が作られたという記録がある。大正末期、洋服の普及に伴い、ネクタイも一般市民に浸透していった。

つまり、日本にネクタイが広まった頃には、世界ではすでにネクタイをすることが常態化していたということである。明治維新以来、海外、特に欧米の文化を輸入することに躍起になってきた日本にとって、洋服につきものとなっていたネクタイを受け入れることは何の抵抗もなかったことだろう。明治政府は積極的に洋装化を推進したのである。

シャツにネクタイをしめると気分が引き締まるような気がするのには確からしい。欧米でも、正式な場合には、やはりネクタイを締めるのが普通である。しかし、ネクタイをしていないからといって、その人の社会的信用や、時には人格まで疑われるというような事態はあまり起こらないのではないだろうか。それが、日本では起こりうるところが問題なのだ。

4、ネクタイと社会的信用

最初に取り上げた国泰寺高校の先生のつぶやきにもあったように、日本ではネクタイをしているかどうかで社会的信用に差が生じるように思われる。

その一つの例が、プロ野球の新規参入を目指して競合したライブドアの堀江社長と楽天の三木谷社長の会見である。堀江社長はよく知られているように、いつもかなりラフな格好をしている。もちろんネクタイは着けていない。対照的に、三木谷社長は常にきちんとしたスー

ツ姿で、ネクタイもしっかりと締めている。マスコミ各社の反応は雲泥の差だった。三木谷社長の話には、皆ある程度の区切りが着くまではきちんと耳を傾けていたが、堀江社長は、話をする前にまずその格好のことをいきなり質問をさけていた。おそらく話したい内容の半分くらいしか話せなかったのではないだろうか。

また、これはある漫画に次のような話がある。幼い頃に目の前で父親が絞殺され、そのことがトラウマとなり首に物を巻くことが不快に感じるようになってしまった。そのため、その人物は、就職試験の際にネクタイを巻こうとすると吐き気がしてしまい、結局ノーネクタイで面接を受けた。彼の成績は極めて優秀だったにも拘わらず、試験官はネクタイをしていないという理由で「場違い」の一言と共に不採用としたのだった。

このような事例が象徴しているのは、どうということだろうか。

そもそもネクタイは完全に服飾の一部であり、服飾はあくまで個人の感性に属するものである。暑ければ着用しなければよいのである。だが、それが簡単にはできないのが日本の社会であり、ネクタイをはずすためには、政府が主導となって「クールビズ」という大々的なキャンペーンを張らなくてはならない。それ自体が、本来奇妙なことであることに人々は気づいていないのだろうか。

5、集団と思考停止

その背景には、一旦決められた形式は、たとえその後、周囲の状況が変わったとしてもあくまで現状維持をして変えようとしなないという日本人の傾向があるのかもしれない。もちろん、形式は社会の秩序を保つために必要不可欠なもの

である。しかし、どのような形式であれ、周囲の状況が変化すれば、それに合わせられなくなってくるのは当然である。そのとき、なぜ、その形式が誕生したのか、何のためにそれが必要なのか、あるいは不要なのか、これからどのようにすべきなのか、大切なのは、そうしたことを主體的に判断することだ。それをしないで、暑くても我慢をしたり、クーラーをかけてしのいだりするのは、本末転倒であり、一種の思考停止の状態と言ってよい。

そもそも、ネクタイの機能性は皆無である。ぶらぶらし、首下が自由にならず、仕事をするに当たっては、都合が良いように思われる。窮屈で仕事ができないのであれば、さっさと取って、仕事のしやすい格好になればよいのではないだろうか。もちろん、必要だと思えばすばい。その判断は、あくまで各人によって主体的に行われるべきだ。

ひとところ、「赤信号みんなで渡れば恐くない」という言葉が流行したが、まさにこの言葉が、日本人の思考停止を象徴していると言える。私たち日本人は自分が属する集団から疎外されることをひたすら恐れるところがある。それと同じ性向が、ネクタイを着用することについても今日のような固定的な形式にしてもまった。ネクタイの着用を求める者も、仕方なくネクタイを着用する者も、結局は日本社会という集団から抜け落ちないようにするためにネクタイを着用しているのである。政府主導で、クールビズという大義名分のもと、みんなが一斉に行ったからこそ、今回の省エネ化はそこそこに成功した。これが、各会社や個人に任されたら、ここまで浸透しなかつただろう。まさに、そこに日本社会の問題が隠れている。

6、終わりに

ネクタイは縛る物ではなく、締める物である。日本人はネクタイという形式にこだわりすぎて、逆にネクタイに縛られてしまっている。クールビズと言われながらも、夏場の面接に背広でネクタイと行った格好で行った人もいると思う。だが、本当にいい会社は、そういった見た目よりも、その人の能力を評価し、自分の意見をきちんと主張できる人を求めているという。その意味では、日本の社会も少しずつ変わってきているのだろう。

冬が近づいてきて、今度は「ウォームビズ」キャンペーンが行われると聞く。だが、そのようなキャンペーンがなされなくても、温暖化対策は個人個人が解決に向けて努力するべきものである。キャンペーンがあるから仕方なくするような対策は本当に根付くことはないだろう。私たちは、ネクタイについて考えることによって、主体的に生きることの難しさと大切さに向き合うことができた。ネクタイに縛られるように、既存の価値観に縛られていては何も変わらない。私たちは、何事についても、自分自身で考え、判断し、自己決定することを大切にしたいと思う。それは、国際社会の中で、他国の人々からの信頼と尊敬を受け、対等に話をしていくために欠かすことができないものである。